《本号の表紙絵》

『質問本草』より鐵樹と文旦

（版権：Sakamaki/Hawley Collection: 2550 McCarthy Mall, Hamilton Library, University of Hawai‘i at Mānoa, Honolulu, HI 96822 USA）

18 世紀後半，薩摩藩主島津重豪は「蘭癖」と揶揄されるほど目新しい学問と異国の珍奇な物に眼がなかった．彼の評価は正負いずれもあり評価は別れるが，学問・文芸を愛し，薩摩の文化度を上げたのが正の業績で，500 万両の借財を作り，藩を破産寸前まで追い込んだ事は負の事跡である．

正の業績の中には藩内に 3 つの薬園（吉野・佐多・山川）を開き，本草書『質問本草』の編纂を命じた事が挙げられる．

この書籍が生まれた背景として，編纂された当時，中国由来の治療体系を学習していた日本の医師達は，中国産の薬材を基本として治療する漢方の治療体系の中，日本産の薬材をどのように位置づけて治療に組み込んでいくのか？という問題につねに直面していた事があげられる．さらに気候風土が本州と違う薩摩の医師達は，得られる薬材の差違があり，治療において大きな困難に直面していたと考えられる．この疑問に対して本質的な解答を与えることが編纂の目的とされた．

編纂にいたるまでにはいくつかの過程があり，まず藩内の吉野薬園で得られた標本（根や種子のサンプルを含む）に彩色図譜五十図と簡単な説明を付けた目録を作成．乾隆 49 年（1784 年）清朝御用達の薬種商，北京・同仁堂に持ち込み中国人に鑑定を依頼した．標本の持ち込みは，薩摩藩と関係が深く，形式的に清に臣従し，朝貢貿易として独自の交易ルートを持っていた琉球人が担当した．得られた結果をまとめた物として彩色写本『質問本草』が 1785 年に成立した．

本書は薩摩を中心として南西諸島，琉球に自生する植物 160 種を取り上げ，各植物について精密な図譜，中国人によって同定された漢名，和名，生態，効能を記す．表紙の図譜はこの中の鐵樹と文旦の項目から抜粋．中山は琉球のことで編者の呉　継志は架空の人物である．清朝に臣従を建前とする琉球の立場を考慮し，当初は薩摩で編纂されたことは伏せられ，琉球人の著作とされた．また写本の形でとどめられ刊行されなかった．正式に刊行されたのは曾孫の島津斉彬の時代であった．

貿易が厳格に規制された鎖国時代，実質的に支配していた琉球を利用し，鎖国制度に風穴を開け，本草学研究のスケールを国外にまで拡げた意欲的な事業であった．

さらに重豪は『成形図説』の編纂も命じた．これは薩摩博物学を代表する著作であり，産業を振興するために藩内に広く頒布し，産物に対する理解と農業の振興，医薬品の効能を知らしめる百科全書としての役割を持たせる目的で編纂された．

刊行までに数度の火災で版木の消失などの不運に遭いながらも美しい図譜を現在に残す．大会プログラムの表紙にはその中より桜島大根の図譜を取り上げた．桜島大根の絵も現在とかなりイメージが違う事も興味深い．

（園田　真也）